

ラストオーダースーツ

神奈川県相模原市 さとう けいこ

作品の前で画家が質問に答えている。「百二十号ともなると、これから自分が何作描くことができるか。そう考えると簡単には次に取り掛かれないですよ」。人生のゴールから逆算することが難しくはない年齢だ。私も『あと何回できるか』『あと何回あれば』などと、日常考える自分に気づくようになった。とは言え、現実には予想通り、目論見^{もくろみ}通りに進むわけでもないと考えつつ、展示室からエスカレーターに向かう。国立新美術館の正面口を出て右手に折れる。つじは蕾^{つぼみ}の前のまだ芽吹き^{めがけ}の時期で、スロープに沿った生垣は黄ばみの増した冬の葉に青さが戻って来ている。乃木坂駅方面に下って行くと、のんびりとした口調の「スーツを作るのは、これが最後になるだろうね」とのことばが記憶の中から漏れて来た。

「スーツを作るのは」は、デパートで紳士服のフロアーに向かいながら父が私にかけたことばで、それを聞いたのは四半世紀以上前のことになる。

一人暮らしをしていた父から、スーツの仕立券をもらったので一緒に見に行つてほしい、と連絡があったのはその一週間前のことだった。還暦を越えて間もない年齢で母が亡くなってから七年、

お礼の品選び、備品の買い替えなど母が担っていた役割が娘の私に回って来ていた。父の住む実家は常磐線沿線の柏にあり、当時、私は職場に近い小田急線沿線の厚木に住んでいた。千葉県と神奈川県であったが、都内を走る営団地下鉄の千代田線の西端と東端に両線がそれぞれ接続していたため、移動はスムーズだった。鉄道だけでなく二時間弱の距離で、月に一回ほど実家に帰っていた。次の週末、二人で市内のデパートに出かけた次第である。仕立券は、創立記念などで職場から配られたものと聞いた。

オーダースーツのコーナーで、生地見本の中から父が選んだのは、細かいラインが複数入っている濃いグレー、本人には馴染みの色合いのものであった。遠目には、近頃聞くこともなくなった呼び名、ドブネズミ色を心持ち薄くした色である。現役の会社員を退いてから、母校の非常勤講師を続けて七十二歳になっていた。スーツを着ると言えばこのためだったが、九年前、肺の片方を取る手術を受けて、会社員の頃と比べかなり痩せて頭もほぼ白髪となっていた。選んだ色合いは、もつと肉付きの良い、エネルギーにシユに働く人が似合うもののように私には思えた。これでは体の細さや髪の白さと言った弱々しさ、老いが目立ってしまう。私は柔らかな印象となるやや薄いグレーの生地を幾つか薦めた。二十代と思しき男性の店員は、父の外見にはふれずに両方の生地の良さを伝えながらも、職業が先生ならばソフトな方がと私の薦めを推してくれた。そのようなやり取りの後、本人の口から出たのは「やはり私は、こちらの方が安心して着ることができる」で、最初に選んだ生地に戻った。周りからどんなに似合うと言われても、

本人がそうは感じない物を着るのは気分的に落ち着かず安心できないものだ。父なりの好み、母の薦めも受けて長年選び着て来た、言わば歴史があるのだらうし、恐らくその最後となるスーツなのだ。今さら娘が口を挟むものでもなかった。

一か月後、スーツが仕立て上がり、次の墓参りで着て来ると連絡があった。母へのお披露目である。そして、まだ咲き残っていたら木蓮^{もくれん}を持って行くとのことだった。木蓮は母が好んだ白木蓮のことで、毎年庭で花をつけていた。菩提寺^{はだいじ}は柏と厚木の間の青山にあり、二月に一回程度、墓参を理由に落ち合い一緒に実家へ帰っていた。自分としては父へのお付き合いのつもりで、墓に参り、その後はほど近い所にあるティールームでしばらく過ごし、夕飯時になるとお気に入りの天ぷら店に移動する。それがほぼ習慣のようなものだった。

当日、菩提寺で待っていると、木蓮の束を持つ父の姿が見えて、身体に合った良いスーツを着ていることがわかった。いつものように墓石の清掃をし、線香と香華^{こうけ}に木蓮を手向^{たむ}けた。新しいスーツに白木蓮、その日父は母に何を話したのだろうか。

菩提寺のこぢんまりとした墓地と道一つ隔て青山墓地が広がる。その青山墓地の端を抜けると青山葬儀所の前に出る。ティールームはその向かいにあった。そこは、椅子に白いレースが掛けられた落ち着いた居心地の良い店だった。墓地に近く葬儀所の向かいという場所柄、元々人の通りの多い所ではなく、週末の午後でもたいてい席には空きがあった。乃木坂駅に近く、夕食時の移動にも都合が良かったため何年か通っていた。後年、国立新美術

館が開館し、日中の乃木坂駅の利用者が桁違いに増えた。件のティールームは恐らくそれを見越して一時閉鎖され、雰囲気は保ちつつも、テラス席のある明るく広い店に建て替えられた。今は週末には数時間待ちも出る人気店で、もはや墓参りのついでに立ち寄ることのできる店ではない。

その日、ティールームで、「N先生のことは話したかな」と父が聞いてきた。「お孫さんが表彰されたとか」、「それは違う先生。N先生は五井に住んでいたことがあったそうだよ。五井はほら、君が帽子を忘れて降りた駅だよ」今から半世紀以上前、養老溪谷に行ったときのことだ。当時小学校低学年だった私は、五井駅で乗り換えで気が急いで、脱いだ帽子を置いたまま両親の後を追った。ホームに降りた家族に、「忘れてるよ」と声がかかった。開いた窓の下の部分から帽子を放ってくれた人がいて、父が走り寄りキャッチしたのだった。そのできごとと共に、五井の駅名は長く家族に記憶されていた。「で、N先生と五井に何か」、「いや、五井と聞いて懐かしかったもんでね。今は船橋だそうだよ。ところで、このスーツ大学に着て行けなくなつたんだよ」と本題に入つた。スーツを新調した教員は何人かいたそうだが、「私が丁度着て行つた日、N先生とすれ違ったんだよ。N先生も新しいスーツで、それがこれとよく似ていて、互いにハッとしたような感じだね。それからN先生は一度も着て来ないから、気にしているんだと思うよ。私も着ては行けないよ」とのことだった。相手が着て来ないのならこれ幸いと思うような世代ではない。N先生は、教授を退職した後も講師として残られた方だそうで、親しくさせて

もらっている先生のようなだった。とは言え、「似てますなあ」などと笑い合えることでは無かったのだろう。「着る機会がどうも少なそうだから、普段でもなるべく着ようと思ってるね」。本人にはすでに解決済みのことのようなだったが、聞かされる方はそうは行かず、赤坂見附の天ぷら屋に場所を変えてから私は話を蒸し返した。

「生地が似ている服でも、着る人の体形とか雰囲気ですいぶん違った印象になるものだし、周りの人は感じないんじゃないの」「いや、学生にね、これまで二回ぐらい後ろから『N先生』と呼ばれたことがあるんだよ。似ているらしいよ」

「なら、N先生に会わない日に着て行けば」

「それが丁度、週二日同じ曜日なんだ」

「N先生の定年を待つしかないか」

「同い年だよ。お互い大正十三年生まれ、辞める時は多分一緒になるね」

打つ手はないようだった。後ろ姿が見間違えられるほど体形や姿勢などが、加えてスーツの好みまでも似ていたらしい。父は、同期生は皆呼び捨てだったので、N先生と呼ぶからには年上の人、と私は思い込んでいた。実際のところ講師となつてからの関係だったのだろう。仕事服として最後のオーダーだったはずの新しいスーツを職場に着て行くことができない。そんな予想もしなかった成り行きだった。

その頃の父は、講師の他に、勤めていた会社から依頼のある製

図を引き受け、日常、庭木の手入れ、体力作りを目指した散歩を続けていた。歩く距離も伸びて、古くからの友人宅近くの手賀沼周辺の散策や、鹿児島県の竹島に還った嘗てのお隣さんへの訪問を楽しむようになっていた。片肺の身体との付き合いに慣れ、肺の手術後、活動の幅が最も広がっていた時期だった。

三年後、N先生が入院され、見舞いに行った時のことを聞いた。病室で奥様にも会ったそうで、「『ここにいてくれた方が私は楽でいいんですけどねえ』なんて言われてね。まあ女の人は言うだろうね」「N先生は言われ慣れてる様子でね」と笑顔で話していた。この歳になると、何が起ころうとも、との意識は持っていたはずで、ご夫婦の明るい様子にほっとしているようだった。

しかし、それは外向きのものであったようだ。退院後、N先生は自宅での療養の後、職場に復帰することなく亡くなった。ご夫妻は成人したお子さんを事故で亡くしていて、それからまだ日が浅かった。N先生の葬儀は内うちで済まされ、後日、父は弔問に伺った。奥様一人への挨拶となつて、互いに涙を堪えることができなかったとのこと。逆縁に遭い、さらなる別れに耐えている人に、落ち着いてことばをかけることなどできなかっただろう。

その後まもなく、講師の職が終わるとの連絡が父から来た。高齢とされる講師の契約が一律に終了と決まったそうだった。N先生のことを契機と言えるのか、年度途中で教員が欠ける事態は避けたいとの理由だった。ただ、その時期には一部学科の定員削減など、少子化への対応が始まっていた。教員が余る事態は予想さ

れていて、話しぶりからは大学の決定に納得している様子が伝わって来た。

年度の終わり、父の勤め人としての生活は七十六歳で終了した。その後、日常生活から講師の仕事は無くなったけれども、他は変わらずに過ぎていたように見えた。庭木の簡単な剪定や製図の仕事も続いていて、スーツは元の職場の人と会う時など、数か月に一回程度は着ているとのことだった。いつの頃からか、古寺に関する週刊誌が届くようになり、名利巡りのバスツアーの葉も溜まっていた。出かける回数は増えていて、以前は好んだ飛行機での旅行が減っていたことは後になって気づいた。

七十歳代も終わりに近づき、父は坂を上る際に息切れをするようになった。その後、夏バテから落ちた食欲が戻らず、体力の低下が進んだ。「毎年、少しずつ落ちていることは感じていたけれど、まだまだと思っていたんだよね」と予想外の弱り様を嘆いていた。八十歳になると一人暮らしは厳しくなり、呼び寄せて同居することになった。家の主が生きている間に本人と相談しながら整理ができ、新しい生活に向けて物を選ぶ、それができることは幸せだと私は自分に言い聞かせた。

当初は、三食をしっかり摂れば体力はある程度戻るものと本人共々期待していた。しかし、食べることも自体も負担となつて、期待通りには進まなかった。二年が過ぎる頃には、外出はもっぱら病院、診療所への往復で、スーツの出番はなくなっていた。その後、救急も含め、外来、訪問、入院、八十七歳まで多くの医療に

助けられた。

秋らしい晴天の続いた日、父は母の待つ所へ旅立った。空気が澄み、相模川を望む病院から、普段よりも対岸の丹沢の山並みが近く感じられ、川を越えて山に向かう秋の鳥に逝く人が重なった。

あのスーツを、柩の中、体に掛けた。

母を見送ってから二十年。再会の第一声は多分「待たせたね」。それに対して、「結構長かったわね」。会話は自然に始まるのだろう。そして母は「新しい背広ね」と気づくだろう。父はスーツの仕立券をもらったこと、娘の私とオーダーに行ったことを伝えると思う。生地選びでのやりとりは覚えてはいないかもしれない。N先生とのことは話すのだろうか。

記憶の中の十五年間で途切れなく流れ寄せる中で、流れに浸りその頃のその日に戻っていた。

「お連れ様、お待ちですよ」。顔なじみの店員の声に我に返る。靴を脱ぎ廊下を進むと、坪庭に毛で覆われた蕾のついた木蓮。再び回想に落ちかけ、仕切戸を開ける。胡麻油の香りが鼻腔に届いた。